

中学校教員を対象とする放射線研修会報告

遠藤 金吾（秋田南高校） 、田中大介（金足農業高校）
※瀬々将吏（横手清陵学院高校）

秋田県が2008年度から募集した「博士号教員」第1号として、高等学校教育の現場で行なってきた放射線教育の取組について紹介した。

Part 1 では、2012年7月3日（火）に実施の、中学校教員を対象とする放射線研修会の報告を行う。講師は秋田県の「博士号教員」3名で、物理系（瀬々）と生物系（遠藤・田中）による「オムニバス形式」で実施した。異分野の教員が協力し合うことで、放射線の基礎（素粒子・原子物理的内容）から原子力発電とエネルギー問題、生物・環境への影響など、3.11以降の放射線教育に求められる広範囲の内容をカバーできたことが特徴である。中学校で手軽に行える放射線実験の実習など、現役教員ならではの、教える立場に立った内容を重視した。事後の質問紙調査によって、複数の研究者による研修が有効であることが裏付けられた。

Part 2 では、前述の放射線研修のみならず、初等・中等教育における放射線教育において重要な放射線教材の開発、とくに生徒と共同で行なった「霧箱」の開発について述べた。福島第一原発の事故後、生徒が放射線に興味を持ったことが発端である。今回開発したものは、霧箱の底面を冷やす材料に若干の工夫をただけ（ヒートシンクを流用）であるが、その簡便さと高性能から、教材として有用であると判断し、英語論文として専門誌に投稿した。また、開発した霧箱を用いた展示に子どもが集まらないことがあった。保護者が子どもの安全を考えてのことであろう。

Part1、Part2ともに、震災後の放射線教育の大きなヒントとなると考えている。すなわち、放射線と安全、エネルギー問題にまつわる話においては、様々な分野の英知を集結すべきであること、また、科学者、児童生徒、一般市民が一体となって展開すべきであることである。